

福岡市博多区

板付周辺遺跡調査報告書

(17)

福岡市埋蔵文化財調査報告書494集

1996

福岡市教育委員会
板付五丁目遺跡調査会

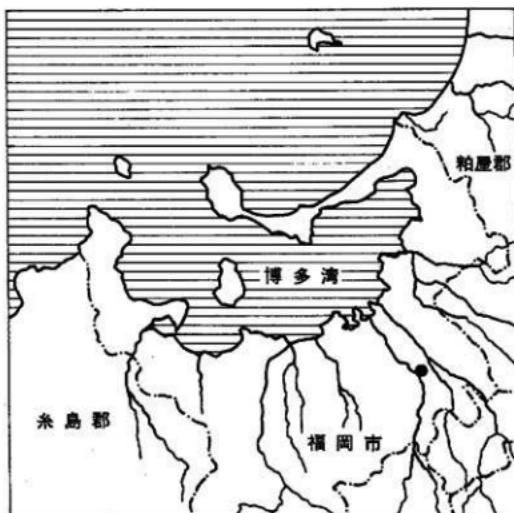
福岡市博多区

いた　づけ

板付周辺遺跡調査報告書

(17)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第494集



次数

調査番号

遺跡略号

板付遺跡群39次

8140

ITZ-39

1996

福岡市教育委員会
板付五丁目遺跡調査会

序

福岡平野の中央部に流れる御笠川とその支流である諸岡川に挟まれた舌状に延びる台地のほぼ中央部に二重の環濠集落で知られる板付遺跡があります。

板付遺跡の調査は昭和24年の発見以来度々調査されてきましたが、昭和51年国史跡に指定され以来、周辺部も開発の波が押し寄せ、開発に伴う事前の緊急調査を実施し記録保存につとめてきました。

その結果、今回報告します遺跡からは弥生時代から古墳時代の水田跡が発見され、出土遺物の中には木製品の樋を始めとして農工具が出土し、古代の技術の高さが窺える資料が発見され、関係各方面の注目を集めました。

この他に弥生・古墳時代の人達が使用した土器・石器・木器の他に水田の水路が発見されましたが、これは当時の人々の技術の高さを物語るものです。

本書が学術研究や学校、社会教育の分野において役立てていただければ幸いです。調査に際し、土地所有者の方、有益な御助言をいただいた先生方をはじめ参加御協力願った作業員のみなさまに、心より感謝申し上げる次第です。

平成8年12月26日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

1. 本書は板付周辺地域における宅地造成等の開発事業に先行して埋蔵文化財の事前調査を昭和56年度に実施した板付周辺地域内緊急調査の報告書である。
2. 事業は板付五丁目遺跡調査会が行った。発掘調査は柳沢一男（現宮崎大学助教授）・二宮忠司が担当し、補助員として小林義彦（現福岡市教育委員会）・渡辺和子（現筑紫野市文化課）が加わった。資料整理・報告書は二宮の他調査員の大庭友子が担当した。
3. 本書の執筆は二宮・大庭が行った。
4. 摂図は大庭が担当した。遺構写真・遺物写真は二宮が行った。
5. 写真現像・焼付けは石津満寿美・尾崎文枝・高橋知代子・桑野正子が行った。
6. 本書の編集は二宮・大庭が行った。
7. 発掘調査によって出土した遺物や図面・写真等の記録類は収蔵要項に基づき整理し、埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。
8. 板付周辺遺跡は從来100m グリットを単位として上から A～R まで、左から 1～25までの範囲を設定し、グリット内の調査順に a から番号を付していたが、混乱を招く事態となつたため次数方式に変更した。今回報告する地点は D-7a 地点が39次調査となる。
9. 摂図・図版内に記した番号は遺物登録番号を示す。
10. 写真図版には写真番号を付した（福岡市埋蔵文化財収蔵要項に基づく写真番号である）。

行政 番号	福岡市 番　号	分布地図 番　号	調査番号	所 在 地	調査対象 面 積	調査面積
40	02	0094	8140	福岡市博多区 板付5丁目14-2	1,517m ²	480m ²

本文目次

第一章 はじめに	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
第二章 調査の記録	5
1. 調査概要	5
2. 検出遺構	5
3. 土層	11
第三章 出土遺物	11
1. 土器	11
2. 木製品	16
3. 石器	16
第四章 まとめ	18

挿図目次

Fig. 1 板付周辺遺跡群の位置図（縮尺 1/10,000）	2
Fig. 2 板付周辺遺跡の山地図（縮尺 1/10,000）	3
Fig. 3 板付遺跡群第39次調査地点周辺図（縮尺 1/1,000）	4
Fig. 4 調査地点とその周辺地形図（縮尺 1/400）	6
Fig. 5 第39次調査地点全体図（縮尺 1/120）	7
Fig. 6 SD-01・02平面・断面実測図（縮尺 1/50）	8
Fig. 7 SK・SD 平面・断面実測図（縮尺 1/60）	9
Fig. 8 上層図（縮尺 1/60）	10
Fig. 9 出土遺物実測図-1（縮尺 1/3）	13
Fig. 10 出土遺物実測図-2（縮尺 1/3）	14
Fig. 11 出土遺物実測図-3（縮尺 1/3）	15
Fig. 12 出土遺物実測図-4（縮尺 1/3, 1/4）	17
Fig. 13 出土遺物実測図-5（縮尺 1/4）	18

図版目次

PL. 1 遺構写真-1
PL. 2 遺構写真-2
PL. 3 遺構写真-3
PL. 4 遺構写真-4
PL. 5 遺物写真-1（縮尺 1/4）
PL. 6 遺物写真-2（縮尺 1/4）
PL. 7 遺物写真-3（縮尺 1/4）
PL. 8 遺物写真-4（縮尺 1/1, 1/4）
PL. 9 遺物写真-5（縮尺 1/2）

第一章 はじめに

1. 発掘調査に至る経過

福岡市に於いて弥生時代の遺跡として代表される板付遺跡は日本における水田耕作・二重環濠集落として標石となっている。しかしながら板付遺跡の水田可耕地域としての範囲は、必ずしも充分に把握されているとはいがたい。

したがって、福岡市教育委員会は、指定地外の民間地域が開発されるにあたって緊急調査を実施し、遺跡範囲の確認してきた。

昭和56（1981）年に博多区板付5丁目14-2番地に住宅建設の申請が提出され、試掘調査の結果、遺跡が立地していることが判明したため、板付5丁目遺跡調査会を編成し、これが56年8月5日から9月10日の約1ヶ月間をかけて調査を実施した。調査対象面積は1,517m²であるが、試掘調査の結果、調査面積480m²に絞り調査した。

2. 調査の組織

発掘調査から資料整理・報告書刊行に至るまで多くの人々の御協力を受けた。特に発掘調査から資料整理まで15年間の永きに渡り報告できなかったことは、諸般の事情と担当者の怠慢にほかならずここにようやく多くの人々の御協力を受け刊行するに至った。記して感謝申し上げます。

調査主体	板付五丁目遺跡調査会					
調査担当	柳沢 一男	二宮 忠司	小林 義彦	渡辺 和子		
資料担当	二宮 忠司	大庭 友子				
資料整理	牛尾美保子	海内美也子	太田 昌子	平山 圓	皆元 幸子	
	尾崎 文枝	高橋知代子	石津満寿美	桑野 正子	木村 紗子	
	安部 宣子	山崎恵美子	石松 悅子			
調査協力者	大部 茂久	津村 武光	徳永 静雄	米丸 次男	三浦 力	
	権藤 利雄	荒木 君子	古賀 博子	久良木シズエ	久保山二三子	
	倉川キチエ	長野 康子	永松伊都子	永松 富子	日比野典子	
	平川 道子	三島タミ子	村崎 優子	安高 久子	山村スミ子	

立地と環境については刊行されている板付周辺遺跡・板付遺跡・諸岡遺跡群・那珂遺跡群等と数多くの報告書が記載しているため今回の報告書では割愛する。

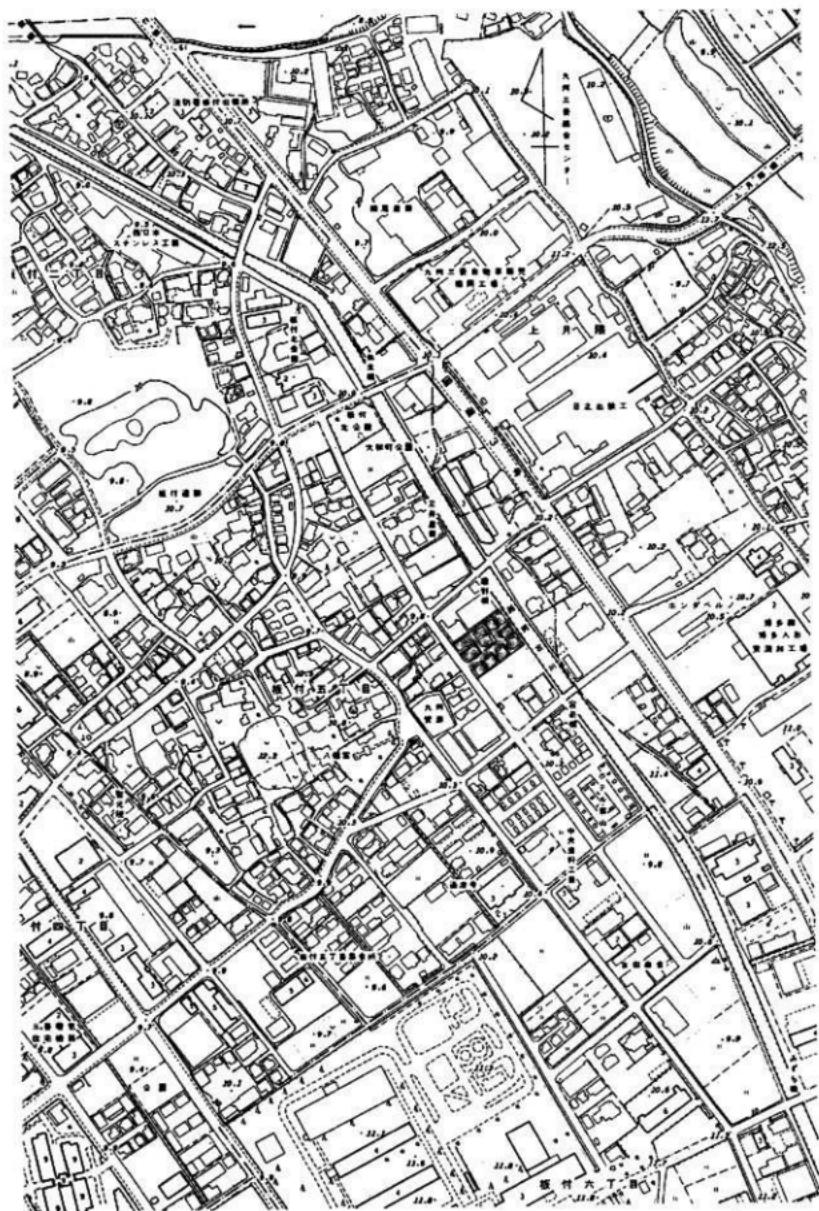


Fig. 1 板付周辺遺跡群の位置図 (縮尺 1 / 10,000)

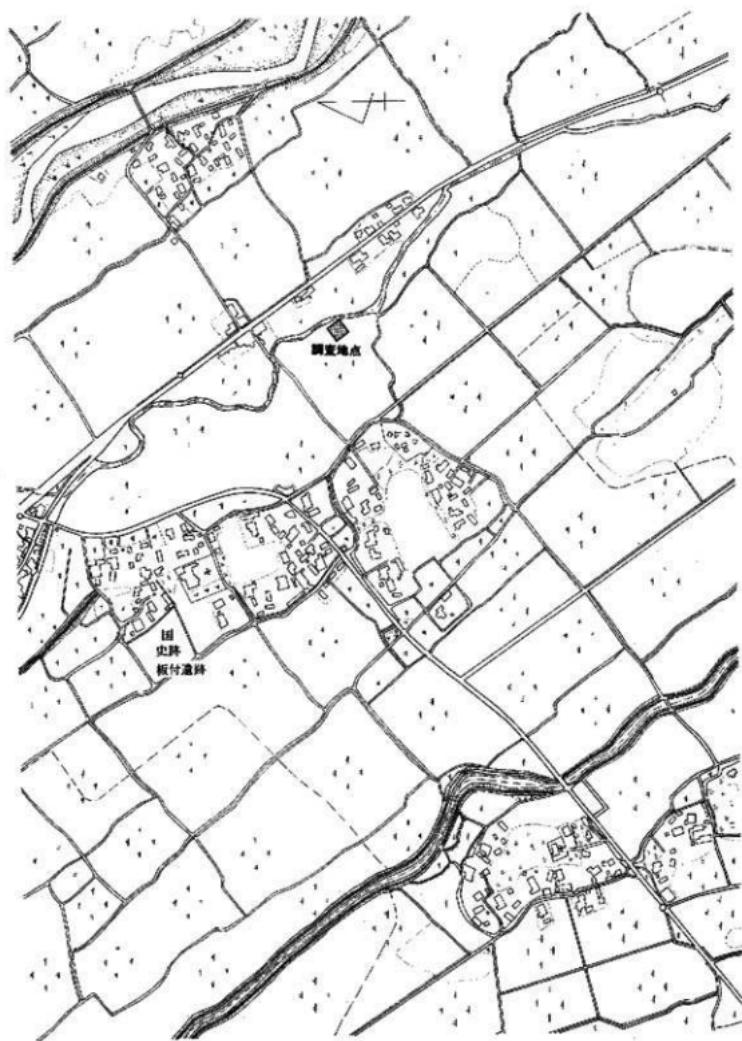


Fig. 2 板村周辺遺跡の古地図 (縮尺 1/10,000)

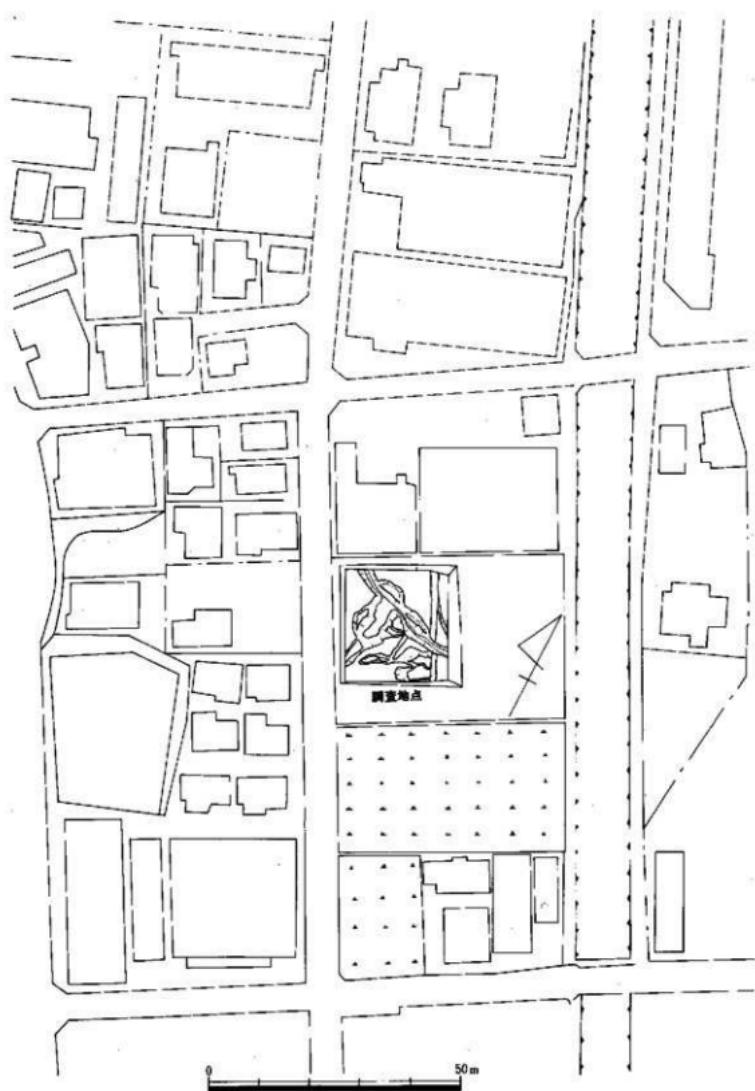


Fig. 3 板付遺跡群第39次調査地点周辺図 (縮尺 1 / 1,000)

第二章 調査の記録

1. 調査概要

昭和56（1981）年に博多区板付5丁目14-2番地に住宅建設の申請が提出され、試掘調査の結果、遺跡が立地していることが、判明したため56年8月5日から9月10日の約1ヶ月間をかけて調査を実施した。調査対象面積は1,517m²であるが、試掘調査の結果、調査面積480m²に絞り調査した。

2. 検出遺構

検出された遺構は、第V層面の中世水田遺構と調査区東側に中世河川水路（SD-03）、第VII層の水田遺構とそれに伴う溝SD-01・02で、時期は古墳時代初期の庄内～布留式土器を出土している。この他に弥生時代後期の溝、古墳時代の土坑、奈良時代の溝が検出された。

弥生時代後期の溝

調査区の東側に検出した。中世のSD-03B、古墳時代前期（庄内～布留式土器併行期）に切られたSD-03Aが弥生時代後期の溝である。この溝の東側は検出できなかったが、現長22m、幅3m、深さ1.5mを測り、南東から北西に延びる。出土遺物は図示しなかったが、壺・壺形土器の破片が出土している。

古墳時代初期の水田面と溝

水田面は、溝SD-02の南側に広がり、水路としてSD-01・02がある。

SD-01は、南から北に延びSD-02に接続する。接続する手前で段がつき、大きな淀み状を呈する。この段の斜面に杭が打ち込まれ、横木を渡して井堰を設けているが、最下部だけが遺存していた。このSD-01の両側には、水田面が広がっていたと思われるが、上面の砂の堆積が少なく、畦畔の検出はできなかった。

SD-01

SD-01の場合、段の上方では、若干位置のずれた二本の溝が重複している（古期をB、新期をAとする）。段下方の淀みでは、大きく広がる上部がAに相当する。

SD-01-A、SD-02上層からは、布留式併行期の、又、SD-01-B、SD-02下層からは、庄内式併行期の土師器（Fig. 11-42）の土師器が出土した。したがって6層水田面は、庄内から布留式期に継続して使用されたと思われる。

南側水田の水口は、SD-01の下段淀みに向かって設けられている。幅1.5m、長さ2.5mにわたってゆるい底みをなし、多数の杭が乱雑に打ち込まれている。SD-01の下段淀み部分の埋土から、鍬・鋤などの木製農具とともに、木製短甲の一部が出土した。

土坑（SK-01～04）

SK-01 SD-03Aに切られる不整形土坑である。H1土遺物はないが弥生時代後期（SD-03A）より古い。SK-02 不整形の円形土坑で北西隅から検出した。出土遺物はFig. 9-1～4で古墳時代前期に位置付けられる。SK-03 SD-01・02によって切されることから古墳時代前期より古い。出土遺物は無い。SK-04 北側隅に検出されたものでFig. 9-5・6が出土した。中世に位置付けられる。

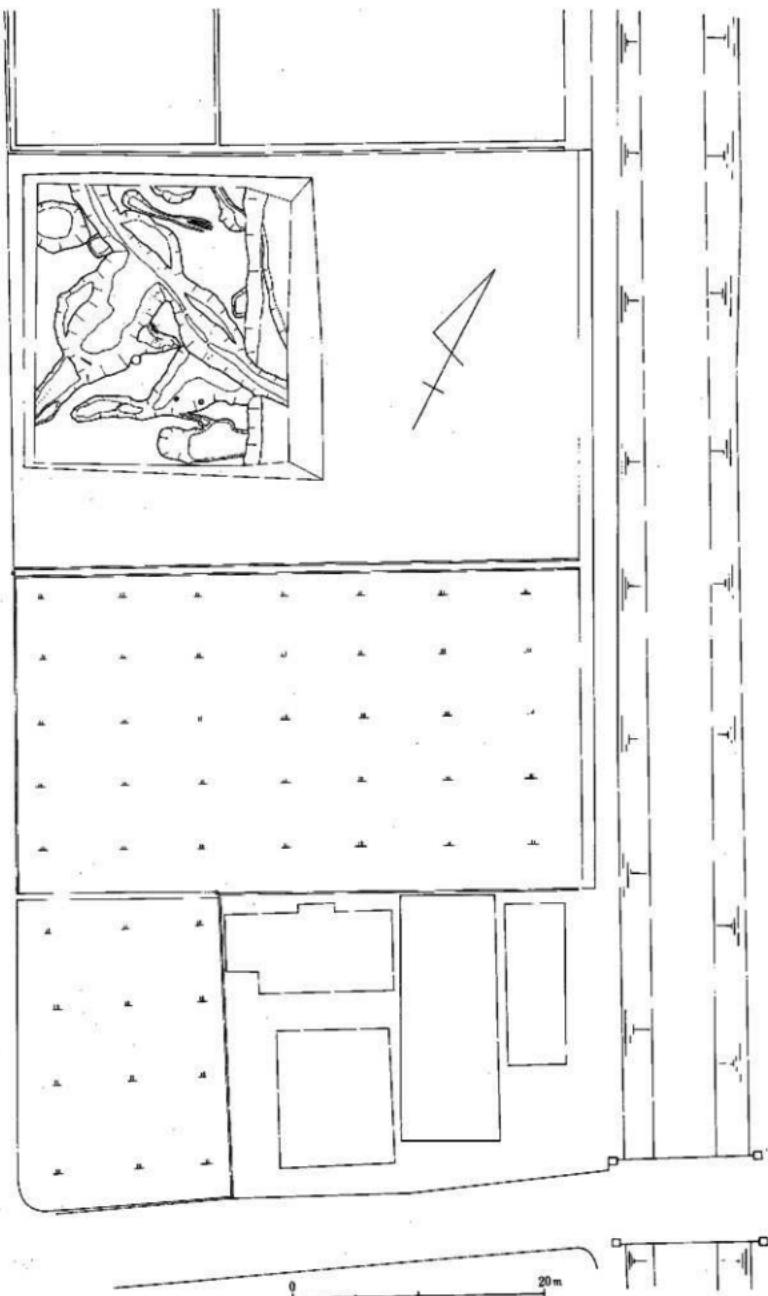


Fig. 4 調査地点とその周辺地形図（縮尺 1 / 400）

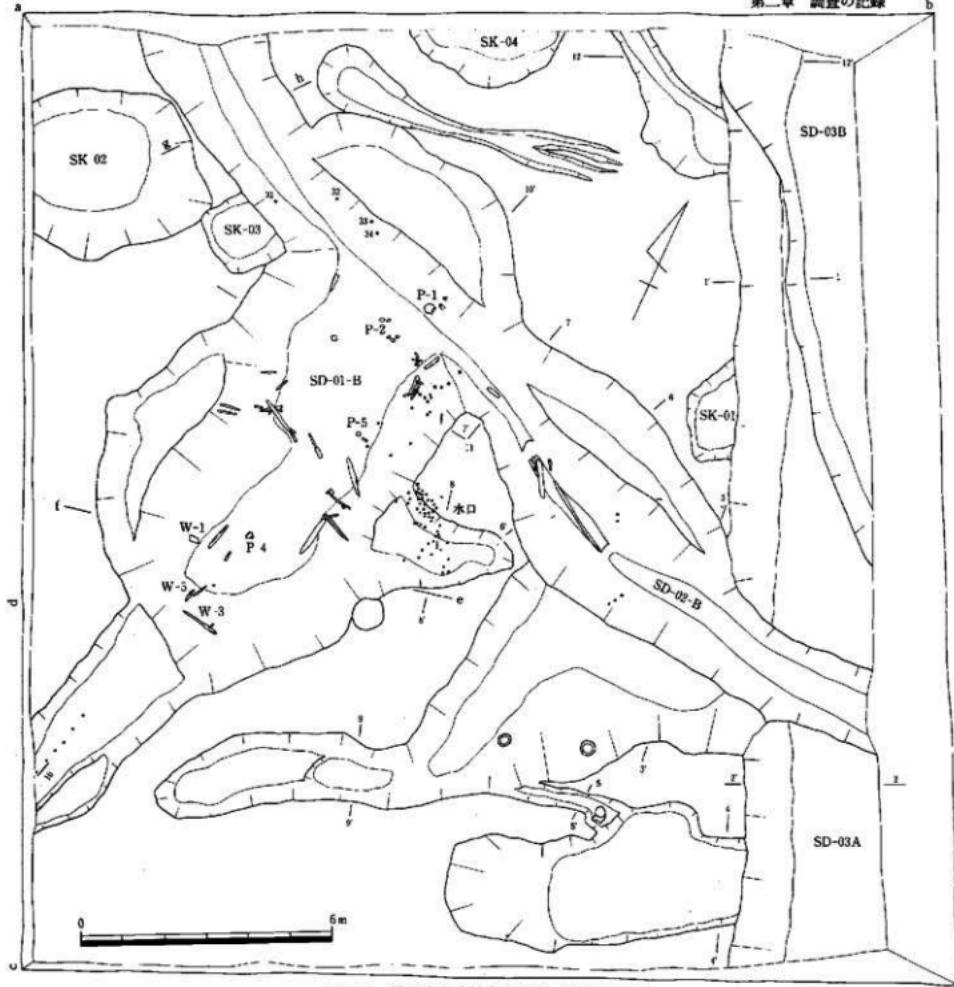


Fig. 5 第39次調査地点全体図 (縮尺 1/120)

3. 土 層

調査区の基本的な土層堆積は、第Ⅰ層 表土(現代水田耕作土)、第Ⅱ層 床土、第Ⅲ層 暗灰褐色砂質土、第Ⅳ層 黒褐色粘質土、第Ⅴ層 灰色砂質土、第Ⅵ層 黑褐色粘質土、第Ⅶ層 黄白色粘土、第Ⅷ層 青灰色粘土である。しかしながら各層ごとに砂の堆積が顯著にみられる。

基本的には第Ⅳ層までが調査区全体に広がるが、第Ⅴ層以下は非常に複雑な様相を示している。

第Ⅳ層を基盤とする水田面が全体に広がり、SD-03(中世)を主水路として使用されている。

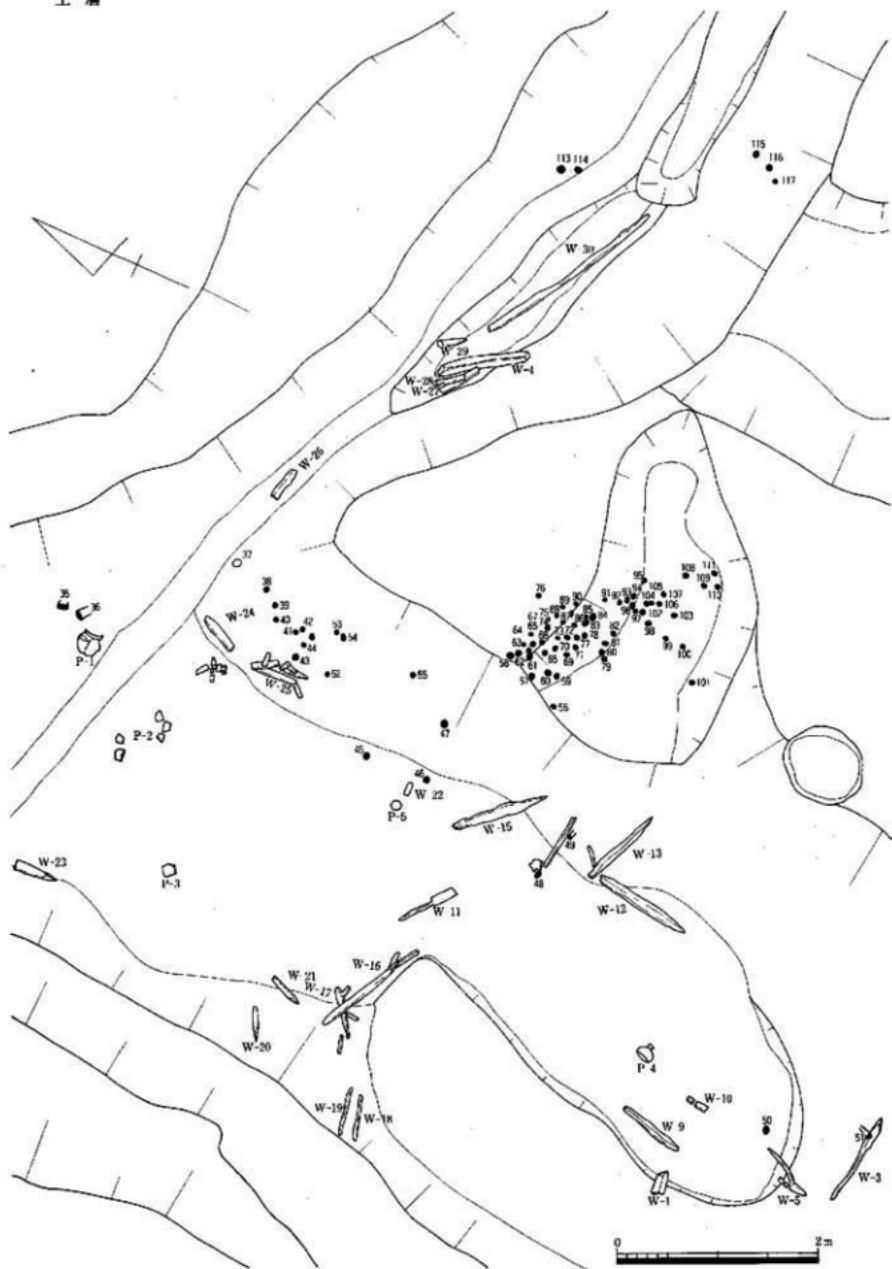


Fig. 6 SD-01・02平面・断面火災図(縮尺1/50)

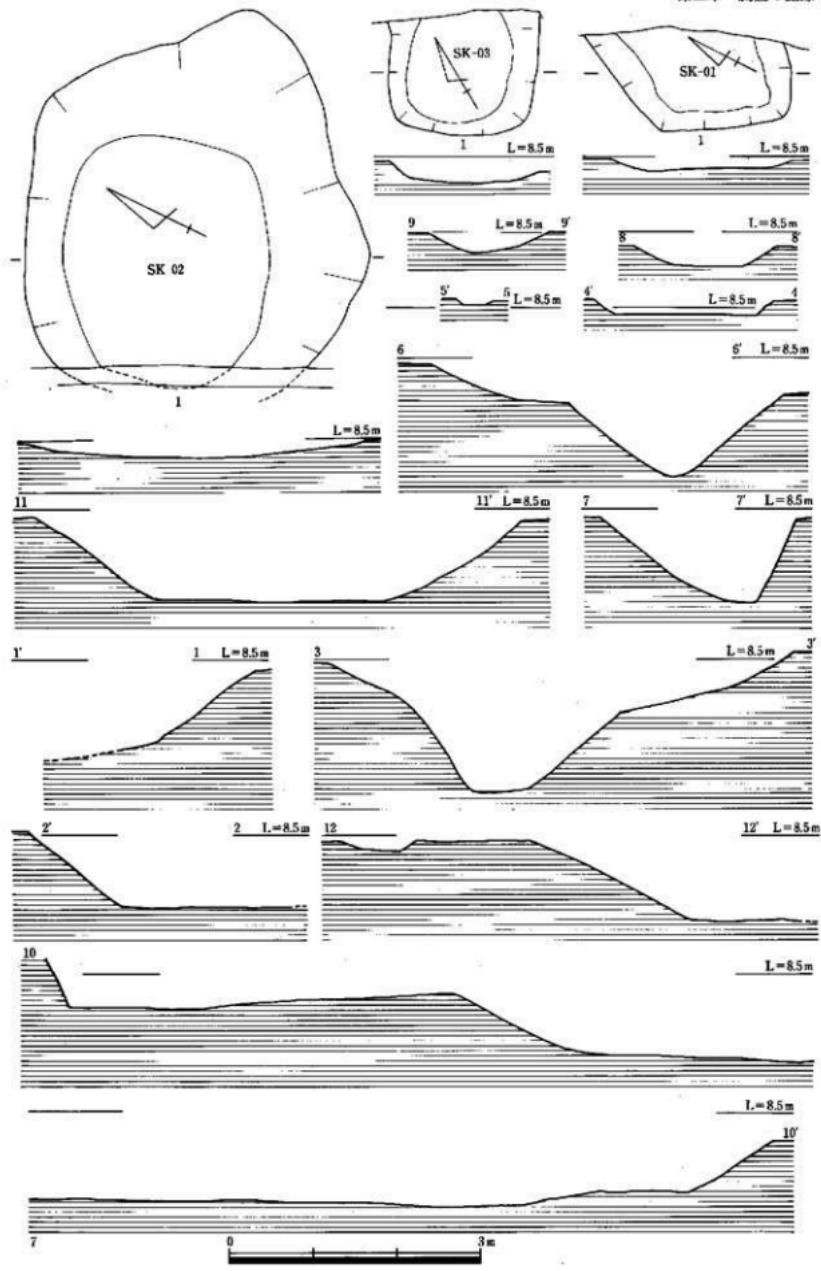


Fig. 7 SK・SD 平面・断面実測図 (縮尺 1 / 60)

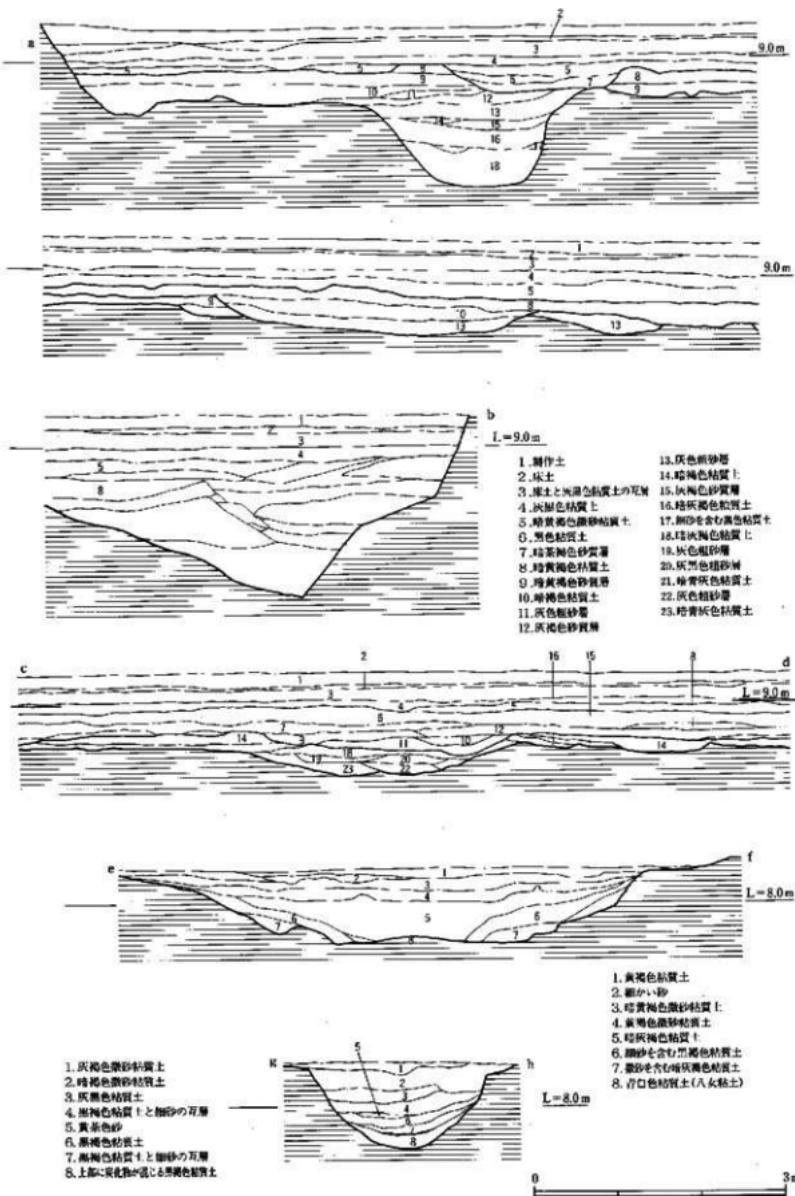


Fig. 8 七層図 (縮尺 1 / 60)

調査区東側には、古川が流れていることから、この河川の影響を十二分に受けたと考えられる。第VI層にも水田面が検出されたが、VI層上面の砂層が調査区全体を覆っていないため、また土坑の重複もあって面として把握できなかった。

第三章 出 土 遺 物

1. 土 器

1 頸部と胴部の境に断面三角形を呈する尖帯を一条巡らせる壺形土器である。器面は摩滅が著しく調整は不明であるが、内面に指圧痕が観察できる。最大径は胴部中央にあり、径20cmを測る。4~5mmの石英・長石粒を含み淡明茶褐色を呈する。2 高环の脚部で、裾部が大きく開き屈曲するタイプで、外表面は器面が荒れているため調整は不明。内面は横方向への箝削りを施す。裾径13.4cmを測る。細かな石英・長石粒を含み、淡明赤褐色を呈する。焼成はやや軟質である。3 小型の壺形土器で底部を欠く。口縁内部に僅かに刷毛目が残り、外表面はナデ調整。口径11cm。4 小型丸底壺で、完形で出土したのはこの1点だけである。球形を呈する胴部から僅かに開きながら立ち上がり端部を丸く納める口縁がある。口径7.8cm、器高8.1cm。細砂・雲母を含み淡明褐色を呈する。外表面ナデ、内面箝削り調整。全面に多量の酸化鉄が付着。1~4はSK-02出土である。5 鉢形土器の口縁部破片で、玉縁状を呈する。内面は丁寧な刷毛目を施すが、外表面は刷毛目・ナデ・指捺えを行い凹凸を呈する。口縁端はナデにより平坦面を造出している。口径26cmを測り、淡乳白色を呈する。内面の一部に黒斑が認められる。6 土師皿で底部端部が僅かに突出している。口径12.8cm、器高2.5cm、底径9.8cmを測りナデ調整。底部は押圧痕が認められ、色調は明茶褐色を呈する。5・6はSK-04出土。7 壺形土器の蓋である。器表面の摩滅が著しく調整は不明。砂粒を多く含み明茶褐色を呈する。8 壺形土器の底部で、底部端が突出し上底を呈し、内外面とも刷毛目を施す。2~4mm大の石英粒を多く含み暗赤褐色を呈し、底径7.4cm。9 壺形土器の底部で外表面刷毛目を施す。外表面の一部に黒斑が認められる。底径8.1cm。10 壺形土器の口縁部破片である。形状は逆L字状を呈し、上面が僅かに窪み両端を丸く納める。内面はナデ仕上げ、外表面の一部に黒斑を有す。11 壺形土器の底部で精製された粘土を使用。外表面に刷毛目を施し、淡赤褐色を呈する。底径7.6cm。12 壺形土器の底部で外表面の一部に黒斑有。ナデ調整で、底径7.6cm。13 鉢形土器で、外側に開きながら直線的に立ち上がり、口縁部で外反し端部を平坦に仕上げている。器面が荒れているが口縁部下に刷毛目が認められる。内面に指捺痕が残る。3mm大の石英・長石粒を多く含み暗褐色を呈する。口径21.2cm。14 脚径11.1cmを測る器台で、内面刷毛目・外表面ナデ調整。15 球形を呈する壺形土器で胴部下半部を欠く。口縁は「く」字状に外反し端部を丸く納め、内外面とも刷毛目調整を行う。口径12.2cm。16 杯部を欠失する高环の脚部で、脚の中央部は膨らみ、下方は外側に「八」字状に開く。裾径13cm。17 「く」字状口縁を持つ壺形土器で底部を欠失する。球形を呈する胴部から内湾しながら頸部で絞まり、大きく外反して口縁部に達する布留式土器である。器面は摩耗が著しいため調整は不明。外表面の一部に煤が付着する。口径16cm。18 「く」字状口縁を持つ壺形土器で、内外面とも刷毛目調整。口径14cm。19 壺の底部で僅かに平坦面が残る。外表面刷毛目、内面ナデ調整を施し、外表面に煤付着。20 小形の壺形土器底部で、内面に丁寧な刷毛目を施す。外表面はナデ仕上げを行い底径3.7cm。8はSD-01、7・9はSD-01A上層、15~20はSD-01A下層からの出土である。21 壺形土器の口縁部破片で、口径27cm。朝顔状に開く頸部に鋸先状の口縁が付く形状を呈する。精製された粘土を使用し、丁寧なナデ調整を行い、内外面とも丹塗りを施す。22 脇部から内湾しながら直線的に頸部に達し、口縁部で大きく外反する。口縁端部が下方に垂れ、口縁部に二個の孔を配する所から蓋付きの壺

形土器である。器面調整は摩耗が激しいため定かでないが、僅かに刷毛目調整が残る。口径20cm。23 平底を呈する鉢形土器で、口縁端部を平坦に仕上げる。外面は刷毛目を施し、内面はナデ調整。口径18cm、底径6.2cm。24球形を呈する胴部から「く」字状に外反する口縁をもつ壺形土器で、口縁上部は消失する。外面は口縁から胴部中位まで刷毛目を施し、底部にかけて箠削りを行う。暗褐色を呈し、一部に煤付着。内面は口縁との巻ぎ目に稜を有し、斜め方向に刷毛目、胴部は横方向の刷毛目、底部付近で箠削りを行う。最大径は胴部中位にあり16cmを測る。口径14cm、器高13cm。25鉢形土器の口縁部で、内外面とも刷毛目を施す。26丸底を呈する壺形土器で胴部上位より上を消失するが、「く」字状に外反する口縁部であろう。内面は刷毛状工具でのナデ、外面は刷毛目調整し、丹塗りを施す。明黄褐色～赤褐色を呈し、残存高22cm。27球形を呈する壺形土器で、外面刷毛目、内面箠削りを施す。胴部最大径16.2cm、口径14.8cm、器高14.2cm。28壺形上器の底部でやや上底を呈する。底径5.6cm、内外面ともナデ調整。29ヒド端を欠損する支脚で外面に指圧痕を残す。裾径7cm。30丸底を呈する碗で、底部から膨らみながら立ち上がり、口縁上端を箠状工具で平坦に仕上げている。外面調整は横ナデ・刷毛目・箠研磨、内面はナデ調整を行う。口径9.8cm、器高4.5cm。31壺形上器の底部で、外面刷毛目、内面指押えに後ナデ調整。底径8.5cm。32逆L字状口縁の壺形土器で、口縁端部を平に仕上げる。外面刷毛目調整。33壺形土器の底部で刷毛目調整を行う。底径9.8cm。34「く」字状口縁を有する壺形土器で底部を消失。口縁端部は平坦面を有し、外面は刷毛目調整で一部にナデ消しを行う。内面は胴部上位に刷毛目と縱方向の箠削りを行う。広範囲に煤が付着。口径14.6cm、残存高18.9cm。35は器台の裾部で内外面に刷毛目を施す。内面に指圧痕が残る。裾径14.2cm。36・37も35と同形態を有し、36の裾径12.2cm、37の裾径12cm。38底部端が突出し丸みを持つ弥生時代前期壺形土器底部である。内外面ナデ調整であるが、外面に指押の痕跡が残る。底径8.8cm、焼成はやや軟質。39裾部が広がらないタイプの器台で、器壁が厚い。外面は指圧痕が残り凹凸を成す。裾径9cm、残存高7.3cm。40 脚付椀形土器で脚の下端部を欠損する。器壁が厚く、器面は内外とも刷毛目調整後箠研磨を施す。脚の一部に指圧痕がある。口径13.8cm、器高10cm。22~40までがSD-01B出土で、30・32・34・38は下層からの出土である。41袋状口縁壺形上器で底部を欠く。頸部の絞まりは強く、外半しながら口縁下で内に折曲がり端部を丸く納める。逆「く」字状口縁で、内側の屈曲はさほど大きくなない。最大径は胴部下位にある。調整は内外面の口縁部がナデ、頸部が外面刷毛目・内面絞り粘土巻き目その後のナデ、底部は外面刷毛目調整を施す。口径8.3cm。42「く」字状口縁を呈する庄内式壺形上器で、外面刷毛目、内面箠削り調整。外面に煤付着。口径16.9cm。43最大径が口縁部にある弥生時代後期後半にみられる壺形土器である。頸部との境に断面台形を呈する突帯を一条巡らし、突帯上に斜め方向の刻みを施す。調整は内外面とも刷毛目であるが、二種類以上の工具を使用している。淡茶褐色を呈し、一部に黒斑が認められる。口径27.6cm。44壺形土器の口縁部である。口縁端部に一条の沈線を巡らす。内側端部は突出して「T」字状口縁を呈する。調整はナデ仕上げ、口径34cm、明褐色を呈する。口縁の一部に黒斑有。45高杯の杯部で中位に段を持ち、大きく外反して口縁部に達する。外面は刷毛目後一部に箠研磨、内面は横刷毛目後、暗紋を施す。口径32cm。46鉢形土器で外面に煤が付着する。調整は内外面とも刷毛目。口径12cm。47球形を呈する胴部に短い口縁が付く直口壺である。やや内側に傾いた口縁は端部で外側に屈曲する。調整は外面が指押えの後ナデ、内側では箠研磨を施す。口径20cmで、明茶褐色を呈する。口縁内側に黒斑があり、焼成はやや軟質である。弥生時代前期に見られる土器である。41~46はSD-02出土。43は上層、42は下層からの出土である。47はSD-04出土で、口縁部を下にして出土した。

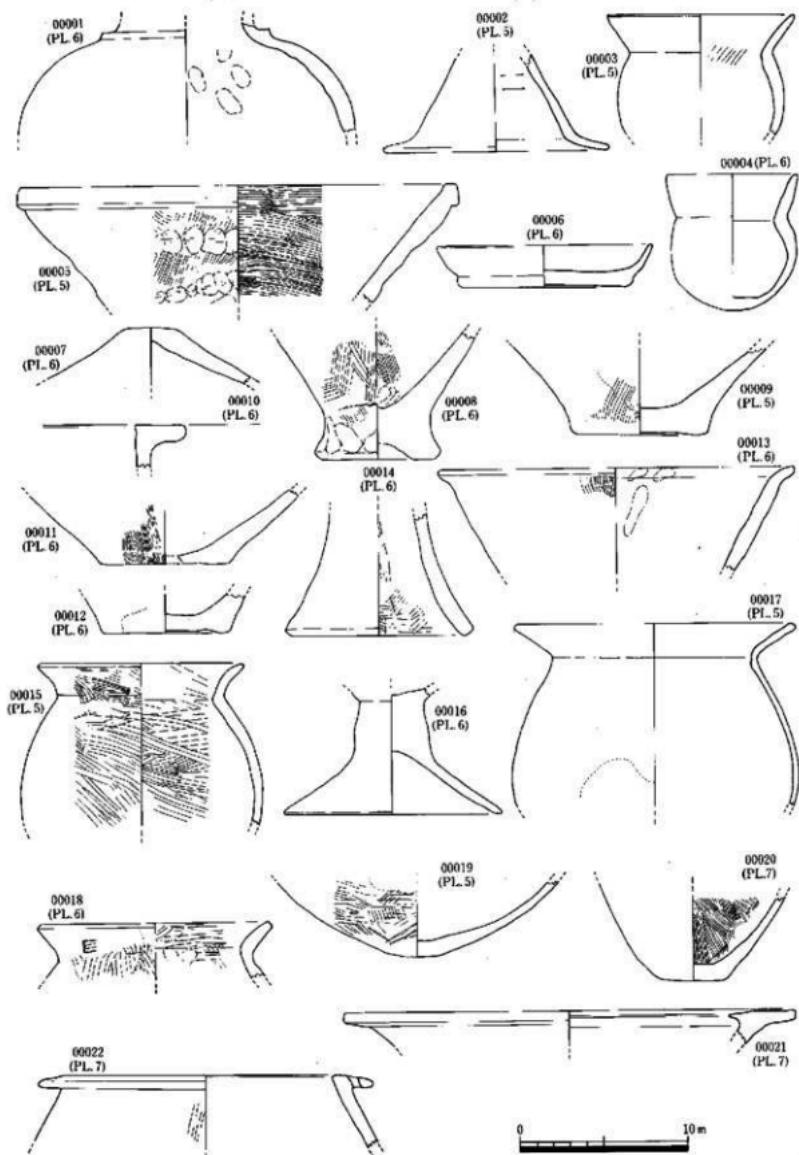


Fig. 9 出土遺物実測図 - 1 (縮尺 1/3)

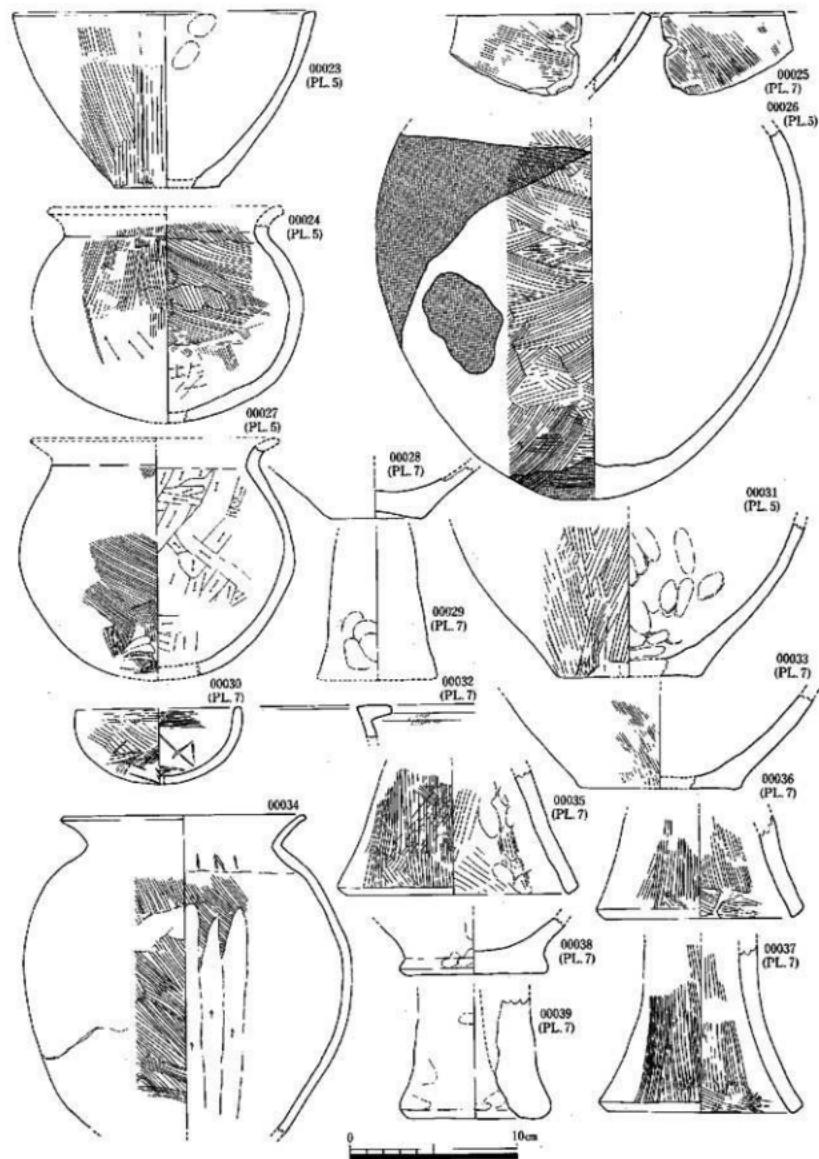


Fig. 10 出土遺物実測図 - 2 (縮尺 1 / 3)

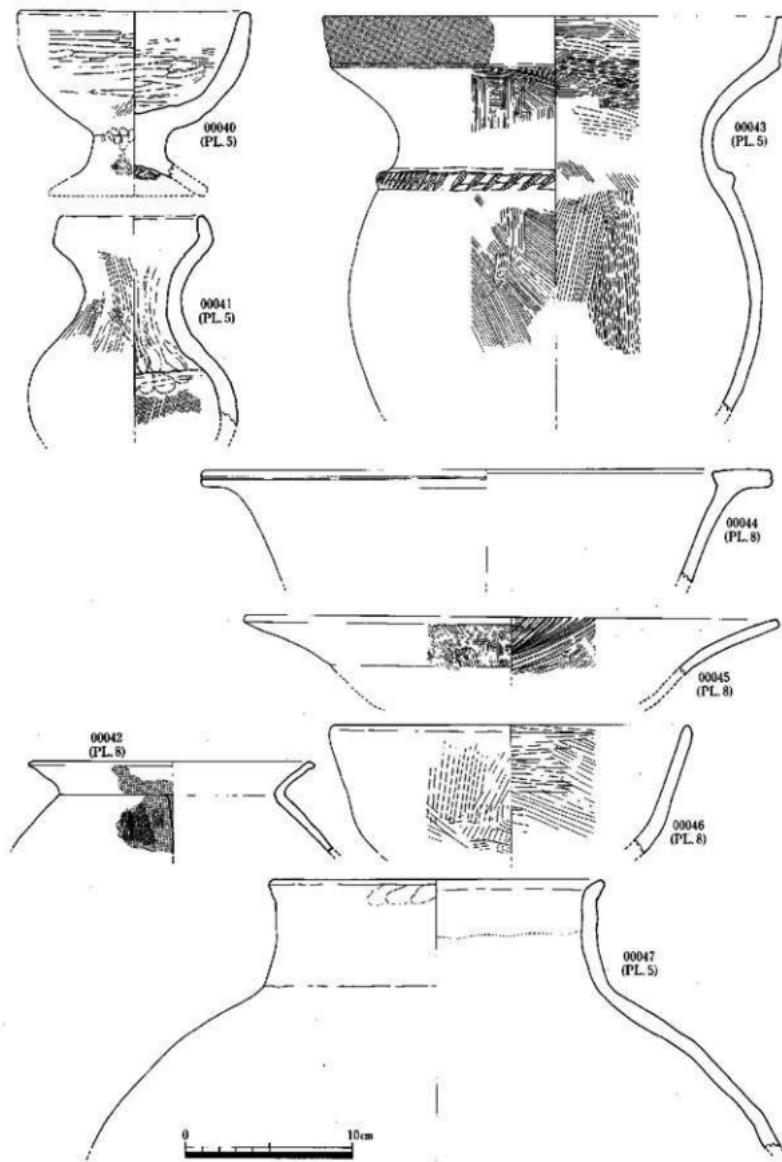


Fig. 11 出土遺物実測図 - 3 (縮尺 1 / 3)

2. 木 製 品

木製品は SD-01・02から殆ど出土した。特に SD-01・02底面から木製品30点と立杭が出土した。図示したものは、農具・武具・服飾具・立杭の15点である。

木製短甲 (Fig.12-30001 PL.4-2・9)

SD-01の下段よどみ部分から木製短甲の一部が出土した。前・後脚に二分する形式の前脚上部にあたると思われる。器面の表面装飾はなく、上端部に近い二ヶ所（上端部に2個、下端部に4個）に小孔が穿たれている。その上部に紐ずれの痕跡が認められる。現長25.7cm、現幅9.5cm、厚さ0.8cmを測る。

衣笠状木製品 (Fig.12-30002)

四本の十字に交わる腕木（一本は欠損）と上端部に伸びる軸受がある。腕木の2本は14.6cm、1本は15.8cmの長さを有し、それぞれの先端部には丁寧な造りの抉部を持つ。上端部（軸受部分）は内側を削り抜くが、途中で終了し下端部までは達していない。軸受上端部にも抉部を有し、丁寧な造りで仕上げている。軸受の長さ19.8cm幅3.4cm、軸受孔2.2cmである。表面には六角の面取りが行われている。出土遺構は SD-01B 下端で土器から占墳時代前期に位置付けられる。同様な形状を有する遺物が出土した遺跡は比恵遺跡群第30・34次調査がある。拾六町ツイジ遺跡群第1次調査では鏡板と考えられる遺物が出土している。

一木鋤 (Fig.12-30003)

把手部分と身（刃部）の一部を欠損している。柄と身がほぼ一直線をなすところから直伸鏹と考えられる。現長は59.4cm、柄長39.4cm、柄径1.5cm、身長19.8cm、身幅6.5cmを測る。

不明木製品 (Fig.12-30004)

径5～6cmの丸木を半割し、先端部を両側面から削り尖らせる。中央部には、断面丸く仕上げた凹を有する。刀剣状木製品の可能性もある部材である。現長36.1cm、幅4.3cm、厚さ2.0cm凹み幅1.3cm、深さ0.7cmを測る。

鍔 (Fig.12-30005～30008)

4点出土したがすべて破損している。二叉・三叉鍔の部材である。材質はカシ材を使用。

立杭 (Fig.13)

削材・丸木材・矢板を図示した。30104は二叉鍔の欠損部材を利用した立杭である。

木製品のうち現存するのは短甲と鍔類・立杭だけである。他は保管状態が悪く消滅した。

3. 石 器 (Fig.12)

石器の出土は少なく図示した以外に黒耀石破片が数点出土した。

石包丁 (Fig.12-10001・10003 PL.8)

10001は半月形を呈する輝緑凝灰岩製の石包丁ではば完形である。穿孔部分で半割しているが、これは後の割れで製作・使用時のものではない。全面に研磨を施し、特に刃部は丁寧な仕上げを行っている。又、背の部分も刃部ほどではないが丁寧に研磨を施している。穿孔は右側からが大である。全長10.0cm、幅4.0cm、厚さ0.3cmで、刃部幅0.25cmを測る。10003は半割した輝緑凝灰岩製石包丁である。紐部が一孔しか現存しないためその全容は定かでない。これが二孔とすればかなり大型のもので推定16cmを測る。研磨は背部まで丁寧に施されていることから使用時に破損したものと考えられる。刃部は左側辺部が長く1.1cmの幅を持つ。刃縁はV字状に銛利に仕上げられている。穿孔は両側から行っており外孔径が大きい。現長7.9cm、幅4.8cm、厚さ0.8cmを測る。

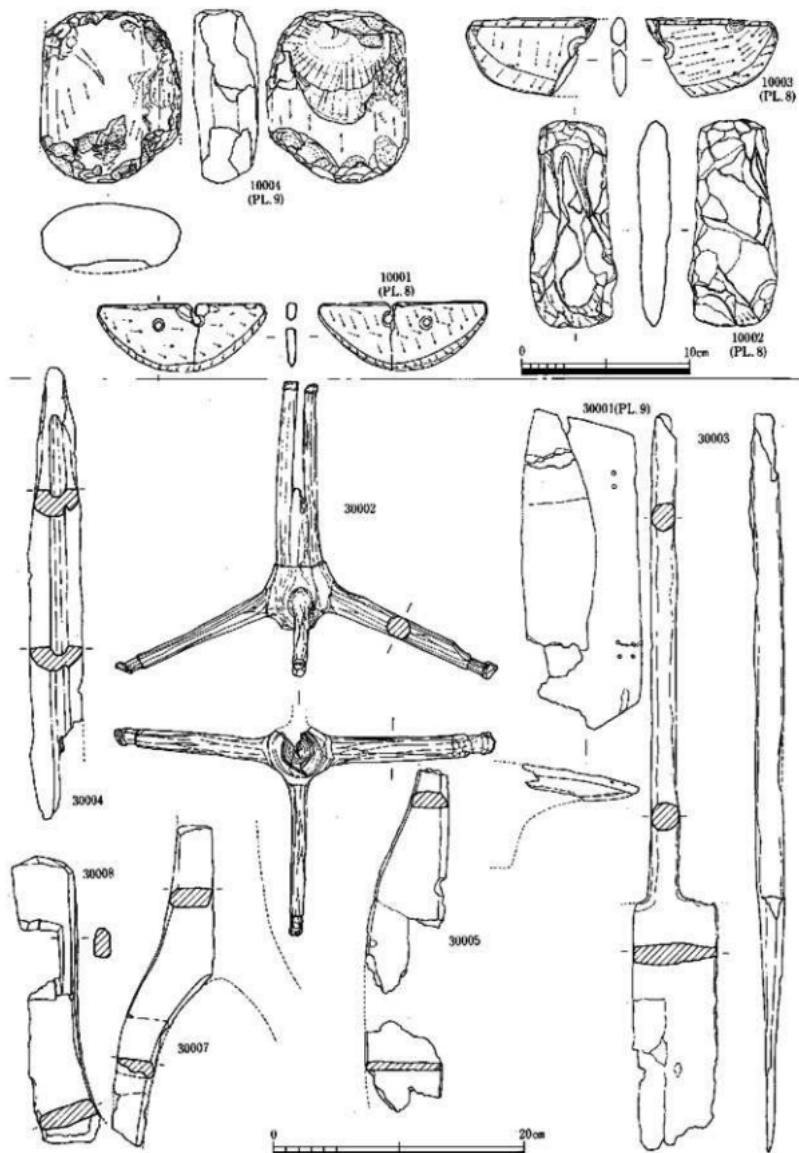


Fig. 12 山土遺物実測図-4 (縮尺1/3, 1/4)

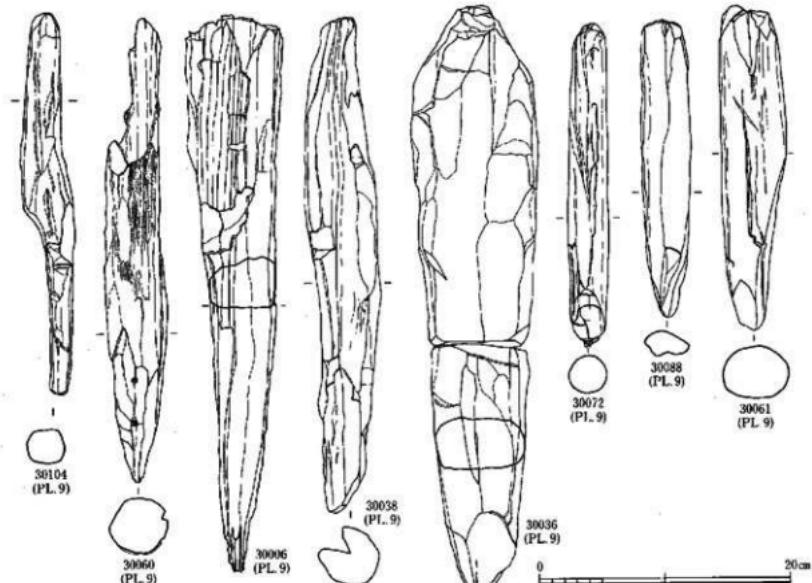


Fig. 13 出土遺物実測図-5 (縮尺1/4)

局部磨製石斧 (Fig. 12-10002 PL. 8)

10002は凝灰岩製の局部磨製石斧である。全体に荒い大まかな剥離を施し、敲打を行わずに直接刃部付近に研磨を行っている。全長12.2cm、幅5.2cm、厚さ2.0cmを測る完形品である。

叩き石 (Fig. 12-10004 PL. 9)

10004は玄武岩製磨製石斧片を叩き石に転用したものである。石斧の基部の平坦面をそのまま残し、先端部は数多くの小さな剥離によって丸みを持たせている。研磨自体は磨製石斧のものであり、表面には敲打部分も現存する。

第四章 まとめ

今回の調査で主な検出遺構は、古墳時代前期の水田造構とそれに伴う溝・水口・杭列造構等である。特にSD-01Bから出土した木製短甲・衣笠状木製品は注目に値する。木製短甲・衣笠状木製品は弥生時代後期から古墳時代前期に比定できる。

衣笠状木製品は出土した段階では紡織具の一種とも考えたが形状から衣笠（蓋・茅蓋）状木製品とした。近畿地方からは弥生時代中期からの出土例もあることからその段階まで遡る可能性もある。

写真図版



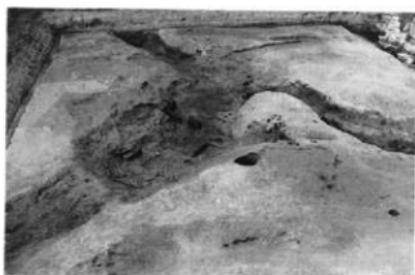
1. 調査前全景（南西）

写真番号(1)



2. 調査全景（東）

写真番号(19)



3. SD-01・02全景（南）

写真番号(27)



4. SD-02全景（北西）

写真番号(106)



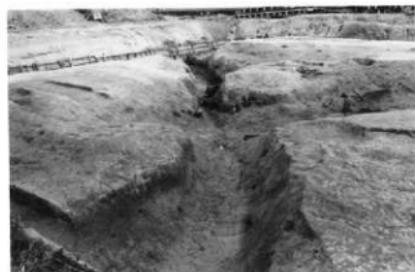
1. SD-02全景（南東）

写真番号(13)



2. SD-02近景（南東）

写真番号(35)



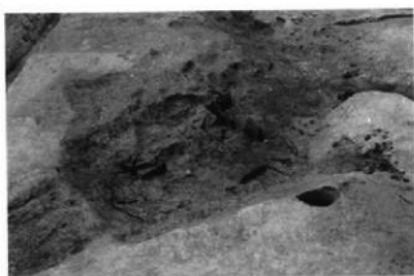
3. SD-02近景（北西）

写真番号(36)



4. SD-01と淀み近景（南西）

写真番号(15)



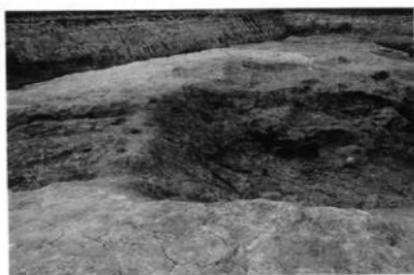
5. SD-01と水口（南東）

写真番号(28)



6. SD-02と淀み部分（北西）

写真番号(104)



7. SD-01と淀み部分（北東）

写真番号(41)



8. 淀み部分近景（南西）

写真番号(45)



1. 水口と淀み部分（東）

写真番号(40)



2. 水口と淀み部分（南東）

写真番号(24)



3. SD-01・02の合流地点

写真番号(49)



4. SD-03・06全景（南）

写真番号(31)



5. SD-01土層断面と杭列

写真番号(58)



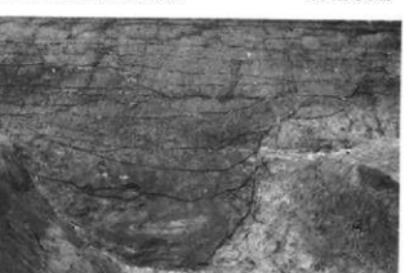
6. SD-02土層断面近景（東）

写真番号(12)



7. SD-02土層断面近景

写真番号(6)



8. SD-02土層断面近景（北）

写真番号(7)



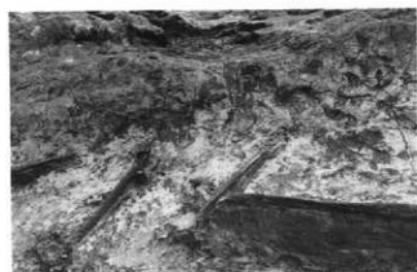
1. SD-01杭列検出状態

写真番号(56)



2. 木製短甲出土状態

写真番号(44)



3. SD-01木器出土状態

写真番号(52)



4. SD-01木器出土状態

写真番号(108)



5. SD-01木・土器出土状態

写真番号(109)



6. SD-01木器出土状態

写真番号(30)



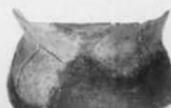
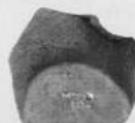
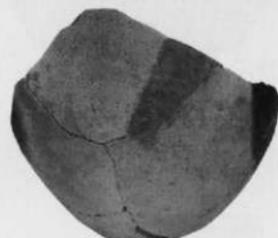
7. SD-01土器出土状態

写真番号(107)



8. SD-04土器出土状態

写真番号(46)

814000002
(Fig. 9-2) (76)814000003
(Fig. 9-3) (74)814000005
(Fig. 9-5) (64)814000017
(Fig. 9-17) (83)814000009
(Fig. 9-9) (68)814000015
(Fig. 9-15) (79)814000019
(Fig. 9-19) (65)814000023
(Fig. 10-23) (75)814000027
(Fig. 10-27) (82)814000026
(Fig. 10-26) (62)814000031
(Fig. 10-31) (81)814000024
(Fig. 10-24) (73)814000040
(Fig. 11-40) (78)814000041
(Fig. 11-41) (77)814000043
(Fig. 11-43) (61)814000047
(Fig. 11-47) (63)



81400001
(Fig. 9-1) (66)



81400004
(Fig. 9-4) (84)



81400007
(Fig. 9-7) (68)



81400006
(Fig. 9-6) (60)



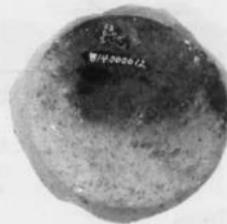
81400008
(Fig. 9-8) (74)



81400010
(Fig. 9-10) (71)



81400011
(Fig. 9-11) (68)



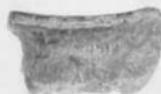
81400012
(Fig. 9-12) (69)



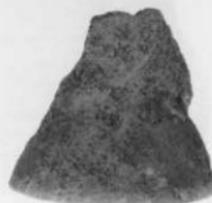
81400013
(Fig. 9-13) (64)



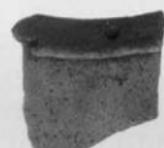
81400016
(Fig. 9-16) (80)



81400018
(Fig. 9-18) (71)



81400014
(Fig. 9-14) (66)

81400020
(Fig. 9-20) (67)81400021
(Fig. 9-21) (72)81400022
(Fig. 9-22) (71)81400025
(Fig. 10-25) (72)81400028
(Fig. 10-28) (70)81400029
(Fig. 10-29) (59)81400033
(Fig. 10-33) (67)81400032
(Fig. 10-32) (72)81400030
(Fig. 10-30) (70)81400037
(Fig. 10-37) (67)81400035
(Fig. 10-35) (64)81400036
(Fig. 10-36) (72)81400038
(Fig. 10-38) (69)81400039
(Fig. 10-39) (69)



814000042
(Fig. 11-42) (73)



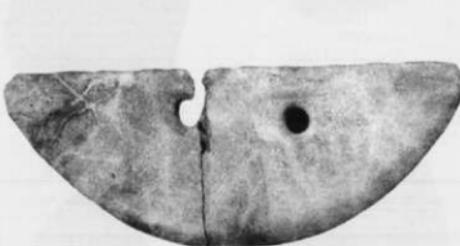
814000044
(Fig. 11-44) (70)



814000045
(Fig. 11-45) (66)



814000046
(Fig. 11-46) (65)



814010001
(Fig. 12) (98)



814010002
(Fig. 12) (100)



814010003
(Fig. 12) (97)



814030104
(Fig. 13) (89)



814030072 (89)



814030036
(Fig. 13) (90)



814030088 (89)



814030006
(Fig. 13) (91)



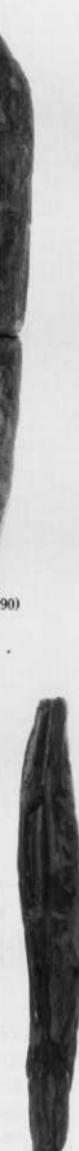
814010004
(Fig. 12) (72)



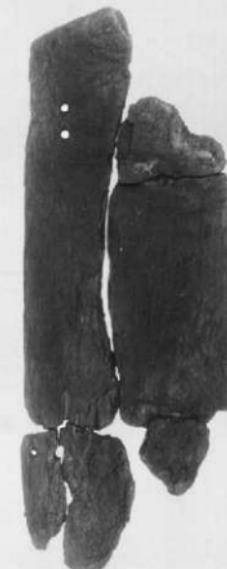
814030061 (92)



814030060
(Fig. 13) (93)



814030038
(Fig. 13) (92)



814030001 (95)

福岡市博多区
板付周辺遺跡
(17)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第494集
発行 福岡市教育委員会
板付五丁目遺跡調査会
福岡市中央区犬神1丁目8-1
1996(平成8)年12月26日

印刷 糸川島弘文社
